

商業英語における Business Jargon

中 村 巳 喜 人

I.

「商業英語 (Business English) は一般英語と同じか否か」ということがあって商業英語学界で盛んに論じられたことがあった。この種の設問は明らかに「一般英語」を言語 (langue) としてとらえているばかりでなく、「商業英語」についても何か商業社会の中でのみ使用されるどころの、素材としての言語を考えているのであろう。言い換えれば、言語活動の主体である話し手 (書き手) を考慮の外においた考え方であり、潜在的な言語の面のみでの静態的な考察である。そうすると、せいぜい、your letter の意味に使われる — あるいは、堂々と使われた — your esteemed favour とか、yours of even date とか、your goodselves (=yourselves) とか、Contents duly noted とかといったいわゆる business jargon といわれる表現を拾いあげて、それらの特殊な用法や商業の場における特殊な慣用的意味を指摘し、そこに一般英語との相違を見出すことぐらいが商業英語研究者の主要な関心事とならざるを得ないのは当然である。

しかし、これらの jargon も ynur, esteemed, favour, yours, of, even, date... というふうに分解してしまえばもはや「商業英語」的特徴らしきものは何一つ背負っていないところのただの英語の「語」以上の何物でもない。

もちろん、なぜ、yourselves の代わりに your goodselves を、your letter の代わりに your esteemed favour という表現を使ったのかという背景にまで立ち入って、その用法が従来の商業社会において占めてきた特異な地位と役割や、あるいはまた、それらの jargon の特異な句の組み立て方になんらかの法則性を探ろうという言語学的取り組みなどは十分評価・研究に値するもの — しかし、このような研究もほとんど姿をあらわしていない — と思われるし、たしかに、それらの jargon が Shakespeare の英語とか Oxford の英語とか Cockney とかいうものと同じような意味で、或る特殊な一つの集団社会 — 職業的・政治的・地理的などの — の言語的性格をもったものであると言えないこともないであろう。しかしながら、そういう business jargon を「商業英語」の存立を可能ならしめる本質的特徴としてとらえることは、何よりもまず、商業英語を langue として考えているという理由で、大きな誤りである。商業英語現象を「商業の場において一定の現実的効果をあげるために英語という言語を用いて行われる動的な言語活動」と見るわれわれの立場からいえば、その商業の場で現実に発話される "We thank you for your letter." は立派に商業英語現象であるし、また、"Well?" という同一の表現は、教室で教師が学生の解答を促す場合にも、売手が買手に代金の支払を督促する場合にも、ひとしく使用されるが、後者の場合にこの "Well?" はやはり一つの商業英語現象である。これを言語の面 — すなわちその最小単位としての語 — から眺める立場からすれば全く同一の表現形式が看取されるだけであり、「これは一般英語か商業英語か」という問いはもはや生じないであろう。つまり、そういう設問の余地すらないと考えられるのではなからうか。

ところで、このような business jargon については、「不自然である」、「archaic だ」、「誇張だ」、「昔の商人根性の自己卑下的表現だ」、「今日の speedy な business

に合わない」などといろいろの理由を挙げて非難されているのであるが、論者のほとんどすべてがこれを *langue* の視点から取上げて、「昔の商業英語は *business jargon* を使ったが今日ではそれを使わない」と見ているわけで、極言すれば、*business jargon* がなければその商業文は新式である、というような考えすらうかがえるものがなくはないのである。

しかし、われわれは、むしろ、*business jargon* という一連の表現について別の角度から解釈しなければならないのではないかと考える。すなわち、それらが盛んに使用された時代は商業社会という場が現在のそれとは違っていたのであって、当時の商人の占めていた社会的地位や教養のレベル——従って商業の場での彼等の心理——からすれば、そういう *business jargon* が使用される必然性がそこにあったと積極的に考えたいのである。現に、今日でも、或る地域においてこれらの *business jargon* が使用される必然性がそこにあったと積極的に考えたいのである。現に、今日でも、或る地域においてこれらの *business jargon* が依然として根強く用いられているという事実は、商業活動の効率から考えてのその是非は別として、やはり一つの事実として科学的興味を十分そそる現象である。逆説的に言えば、現在盛んに叫ばれる "Write as you talk!" (話しコトバで書け) という主張も、実は商業そのものの本質から必然的に生れてくる帰結ではなくて、過去の場合から大きく変貌した現代の商業の場——さらには、具体的な一個人としての商人の置かれている場——からくるところの要請であるはずである。いくら "Write as you talk!" だからといって、米国の *sales letters* に見られるようなあまりにも馴れ馴れしい表現が初めての海外取引先宛てには使えないのはその間の消息を物語るものといえよう。

Business jargon は特定の語・句に付与された特異な意味づけ(例: *it, they, them* の意味に用いられる *same*; *to send* の意味に用いられる *to hand* など)、または特定の句の組成のしかた(例: *we beg to advise*; *up to this writing* など)として発生してきたものであるけれども、その発生の根源に遡って考えてみるときは、やはり、ある時、ある所における個人の〈場〉と密着した言であったにちがいないし、現在とは違った歴史的・社会的背景を背負った商人の言語活動として見るができると思うのである。個人Aが使用した *business jargon* がたまたまその特定の〈場〉で好ましい現実的效果を収め得たためにその経験を土台として、彼は、類似のケースであれば、他の〈場〉でも同じ *business jargon* を使い、それが相手方Bにも好ましい印象——*business* 的に——を与えたとすれば、BはAを模倣してその *jargon* をCに向けて使したであろう。このようにして、その特定の *business jargon* が使用者範囲を次第に拡大して一種の地域的方言・職業的方言としての地位を獲得していったことが考えられる。かくして *business jargon* が *Oxford* 英語や *Cockney* などと並ぶような意味で、商業社会という一つの利益社会で用いられる *langue* 的性格をもつものとして、すなわち、既に在る共同社会の言語(普通語)の上にもう一つの *minor* な社会集団としての言語として生成したのである。しかしそれはどこまでも既に在る共同社会の言語(普通語)の上に別に設けられた体系であり、しかも、その普通語という基盤に対してなんらかの添加・削減・修正を施したものにすぎない。従って、それらは二次的発生の言語である。

既に述べたように、*business jargon* も、例えば、*your, esteemed, favor, dated...* というふうに分解してしまえばもはや一部の論者の言う「商業英語」的特徴らしきものは何一つ残らない、ただの英語の「語」だけである。だから、言語の最小単位は語であるから、語に関する限りにおいては、そういう *business jargon* も、もはや *langue*

としての独立性を主張し得ないことになる。ただ、特異な成句法や用法が従来の商業社会において占めていた特異な地位と役割に着目して、そこに或る特殊な一つの集団社会の「言語」の性格を認めることは不可能ではないということであった。つまり、一つの共同社会の内部において、商人社会という或る定まった自覚的目的の達成のために結ばれた特殊社会がそこだけに通じる言語として business jargon を考えたという見方である。このような特殊語は商業社会に限ったものではなく、宮廷語、官庁語、軍隊語、学生語なども存在するわけである。

換言するならば、そういう特殊社会の成員がたがいに言語活動を行う場合に、その使用する言語が、個人個人の間で多少の相違はあるとしても、大体において等しい——つまり普通から離れているという特異性において等しい——という自覚をもち、次に、等しくなくてはならないという規範意識をもつのである。だからそこに一種の言語統一が見られるわけであるが、しかし、ここで注意しなければならないのはその統一性や体系は普通語とは比較にならないほど脆弱であり不完全であるということである。どうして business jargon に対してそのような規範意識をもつようになったかは往時の商人の社会的地位・教養的背景などいろいろの要因が考えられるであろうが、問題はその規範性ないし拘束性である。Business jargon が言語的性格をもったとしても、それは、日本人または英国人が、朝から晩まで、日本語または英語を喋ると同じような意味での規範性または拘束性をもつものではない。いな、それは方言ほどの言語性もないのである。彼等は日常の話しコトバの中で business jargon の表現を使うことはなかったであろうから。つまり、机に向かって business letter を書く段になると彼等は改まった気持で——意識的に——business jargon を使った。日常使う話しコトバ（普通語）と business jargon（特殊語）との間にいずれを採るかという選探があった。これはわれわれがいわゆる“commercial correspondence”華やかなりし時代に、普通の英文を書くときは違った気分 business jargon の表現に切り換えて手紙を書いたときの事情にも似ている。いな、現在でも、いわゆる発展途上国からの書簡に相変わらず旧式の商業英文が見られ、随所に business jargon が見受けられるが、それも writer の側にあって、そういう表現を使用しなければならないという意識——商業英語学的に見れば現代の business の要請に副わない誤れる意識——があるからであり、その時点において、自分は、話しコトバを使う〈場〉とは別個の〈場〉に立っているという認識が writer の側にあるからである。その認識は多くの場合誤ったものであるけれども、学問的正確を期するためには、彼の立っている〈場〉の具体的考察を離れて一概にそうと決めつけられないものがあるであろう。

要するに、仮りに business jargon を一種の langue として考えるとしても、そこには、使用にあたってかなりの恣意性があり、選択があるという点で、「普通語」とは大分性格がちがう。それは“money”という語が金銭を意味し、“insurance”という語が保険を意味する——あるいは逆に、金銭を意味するためには“money”という語を使い、保険を意味するために“insurance”という語を用いなければならないというような、それほどの強い言語的拘束性をもったことはなかったであろう。“We have received your letter of February 9.”と言いたいところをそう言わずに“We are in due receipt of your favor dated 9th inst.”と表現したとすれば、そのときの writer の側にはかなりの工夫——わざとらしさや意識性——があったはずである。それは、火事を見て“Fire!”と言うほどの直接的言語拘束性をもたない。この場合にももちろん語の選択

が行われるけれども、それとは比較にならないであろう。つまり、彼は "We have received..." と言うかわりに "We are in due receipt..." とも言える事情にあった。いな、"We have before us your letter..." とも、"We are obliged for your favor of the 9th inst." とも、"Your letter of the 9th's date duly to hand." とも言える事情にあったのである。これらはいずれも business jargon に属する表現であるが、これらの中からいずれの表現法を選ぶかについては彼は十分選択の余裕をもつ。それは既述のように、方言ほどの拘束性もなかった。東北人同士が東北弁を、鹿児島人同士が鹿児島弁を使うとき、彼等は標準語との差をいちいち意識しながらその方言を使用してはいない。むしろ、反対に、標準語を聞き、使わされるときに、よそよそしさを感じるのではなからうか。ところが商人にとって business jargon と普通語の関係はこれとは全く逆である。よそよそしさはむしろ business jargon の使用において感じられたはずである。なんびとも話しコトバの中で "Pursuant to your question about premiums, I beg to state that I have referred same to Mr. Jones, who, I trust, will write to you in due course of time or in the very near future." というような表現は用いないであろうから。さらに極言するならば、手紙の場合でも初めから終りまで business jargon だけで埋めつくした手紙はいかに旧式の商業英語時代でも存在しなかったであろう。

極めて意識的な選択がある、というこの点に、われわれは business jargon さえもこれを文体の問題として取扱いたいと考える根拠があるのである。恣意性があり、選択の余地があったからこそ business jargon が近年烈しい批判を浴びて衰退したのである。

s jargon に対する批判は「Business jargon の使用は効果的でない」ということよりも前に先ず「Business jargon を使わずして business writing が可能である」という事実に対する開眼であったのである。

従来、商業英語の学問的研究において business jargon の存在が — その批判とともに — 「商業英語」を langue の観念と密着させる一つの大きな原因となっていたのであるが、われわれは上のように business jargon を性格づけることによって、商業英語現象を「商業の場において…英語という言語を用いて行われる動的な言語活動」として把握するわれわれの立場を貫けると考える。

II

以上で、従来 business jargon の存在が Business English を langue として考える枠からわれわれを抜けきれさせなかった原因になっていたこと；しかしながら business jargon は一つの langue としての言語体系をもつものではない；せいぜい二次的発生のもので方言に近いものであるが、その langue 的性格は方言とも比較にならぬほどその拘束性が弱いこと；従ってそれを使用しなければならぬという必然性よりはむしろ普通語を採るか B.J. するか選択があったことについて考察した。

この jargon の拘束性の強度は時代により、また商人としての各個人の〈場〉によって異なるであろう。例えば、"I beg to state..." というような表現が現在のわれわれに与える印象と、15^c、16^cの人びとに与える印象とではそこに大きな相違があるだろうし、その不自然さ — 話しコトバからの距離感 — もちがうであろう。

日本でも戦前は、われわれは商用文その他の公用文には候文を使用したか、友人間その他

の personal letters には口語体で手紙を書いた。しかしもっと以前には候文の使用範囲は personal letters にも及んでいた。「承り候処貴品売捌ノ為日本ニ代理店御入用ノ由何卒御用仰付被下度願上候」——この種の商用文が書かれたのであるが、ごごちない気持で書いた——書く〈場〉におかれた——人たちも多かったであろう。そしてこのごごちなさはかなり以前から既に感じられていたようである。——

「その後御無事にお暮らしなされ候ことと存じ候。(中略)

近ごろは文学書は嫌になり候。科学上の書物を読みをり候。当地にて材料を集め、帰朝後一巻の著書を致すつもりなれど、おれの事だからあてにはならない。ただ今本を読んでいるとせっかくの自分の考へた事がみんな書いてあった。忌々しい。

先だつて桜井氏より手紙参り候。そのまへ桜井氏宛にて留学延期(仏国へ)の件周旋頼みおき候ところ、延期は文部省にていっさい聞き届けぬよしにつき、泣き寝入りに候。帰朝後は東京におりたいと思へど、この様子では熊本へ帰らねばならぬかもしれぬ。お前もその覚悟をしているかい。(以下略)」

明治 34 年 9 月 22 日ロンドンから夫人に宛てた漱石の手紙である。この、候文→口語文→候文→口語文の移行が何とも興味深く、漱石はそのような文体の変化を意図的に狙ったわけではないが、そこに彼の気持がかえって見事に表現されているようである。それはともかく、候文の langue としての拘束性がよく感じられる一節である。

この候文は戦後になると公用文からさえも姿を消してしまった。(連合軍の進駐が日本語に及ぼした影響は、漢字の制限・仮名づかいの改革・左から右への横書・候文の廃止等を含めて、世界の言語史でも特筆すべき大事件だったとわたしは思う。) その結果候文が今日の日本人に与える印象は年令・世代によってずいぶんまちまちで、かつ、複雑である。

候文はいわゆる「なり」、「たり」の文語体を基調として成立つところの、口語体、文語体と並ぶ文章形式である。手紙を書くには教養ある人なら必ずこの様式を採らねばならなかったという意味において、それは langue としてのかなり強い性格をもち、拘束性をもつものであった。

ところが、business jargon は特異な語句ないし表現形式であつて普通語ほどに体系的なものでなく、一通の書簡全体を business jargon のみで埋めつくせるというようなものではない。従つて普通語か B. J. かの選択の余地は候文か口語文かの選択と比べてはるかに大きかつたと言つてよいであろう。

かつては士農工商といった商人卑下の身分的羈絆を脱して今や対等の立場に立つ商人、速度の単位が全く違つてしまつたほどに speedy に処理しなければならない business、万事が能率本位になり、言わなくてすむ冗句は——相手に与える悪印象は別にしても——それを使用するだけで無駄になる。それをタイプするに要する時間、タイプライターの損耗、タイピストの手間、便箋・カーボンペーパーの無駄等々は冗句の使用によってそのままいくらかの金銭的浪費につながる。また sales promotion を初め business 全般にわたつて心理学的考察を加えて相手に迫ろうとする今日の business behavior やこのような business の背景をもつた一人一人の商人の立つ場は先づそういった時代・環境の大きな影響を受けざるを得ない。

それゆゑ、business jargon の廃止・衰退は先づ、現代の business の要請から生じた——否、ヨリ正確にいうならば、現代の business の要請に関する商人の認識から生じた現象なのである。

この B. J. 批判は周知のように能率的な business の先駆者たる米国を最初の舞台としてスタートした。The fittest survives. の法則は business の世界で最もきびしく作動する。ヨリ効率的なものが残り、ひろまる。そして新しい Business English はやがて英国にも伝わり、今日では "Write as you talk!" が business writing のスローガンになった。

それでは "Write as you talk!" という声はいつ頃から起こったものか。古い時代の business letters はどうであったか。もしそれが business の場だけでなしに、当時の書きコトバ（あるいは話しコトバ）において比較的広汎な一つの傾向として使用されていたのであるならば、われわれは business jargon にもっと langue 的な地位を認めてやらなければならないであろう。B. J. が非難され始めたのは前述のごとく business の場が大きく変動したためであるが、それではその時まで B. J. は自然なコトバ (a natural way of speaking or writing) であったのか。それが新しい Business English の運動の抬頭によって突然旧式扱いにされてしまったのか。それとも B. J. は大分以前からその同時代の lang e との間にズレがあったのだろうか。

III

古い英語の書簡としては Paston letters があるが Paston letters 自体は social letter と commercial letter とが未分離という性格をもっていたし、一方、OED によれば、yours を your letter の意味に使い始めたのが 1536 年、inst. を this month の意味に用いたのが 1547 年；as per (=as stated by~, according to~) が 1588 年；Sb としての invoice の登場が 1560 年〔この語源は invoyes で invoy (=Something sent) (O.F. envoi) の複数形だといわれる。envoy は今日の英語である〕；「為替手形」の意味での bill が 1579 年、いずれも at random の拾い上げだが、一方 business の世界はどうであったかという、英国最古の B/L の出たのが 1538 年、英国最古の insurance policy が 1613 年、現行のロイド保険証券が出来たのが 1779 年、従って、貿易慣習としての C. I. F. はこういう documents の利用が広く一般に認められてからのちでなくては考えられないから大体 1800 年代と見られる。* として

* Scrutton, Charter parties and Bills of Lading, 13th ed., p. 2

Gow, marine Insurance, 4th ed. p. 27

上坂西三「貿易慣習の研究」 p. 20

Royal Society が設立されたのが 1662 年、英語・ラテン語の併用が盛んに行われたのが 17 世紀、18 世紀、business jargon らしい妙な表現がぼつぼつ現れたのが前述のように 16 世紀以降だからわれわれの当面の研究としてはやはりその頃以降の letters が直接関係をもつと考えてよいであろう。

Prof. Carl A. Naether の名著 "The Business Letter" によると、初期の書簡はみんな驚くほどの類似性があり、優れた手紙と考えたものを次々と copy していった。そういう書簡を集めた教本が出版されると、そこに載っているいわゆる model letters の内容が、部分的にあるいは全部そのまま、商人によって借用された。Letter writing の術に未熟な商人たちは自己の必要をみたく model を一心に捜し求めた。だから独創性とか相手に対する思いやりよりは形式、正確、表現の美などに強い関心をもった。他人の書いたものをそのまま模写するというこの習慣は特に opening paragraph や closing para-

graphにいちじるしい。いろいろの〈場〉にも使える一般性の高い内容の語句も同様である。

Business lettersに関する最初の教本の一つと見られるものはAngel Dayの書いた1626年ロンドン発行の本であるが(Carl A. Naether前掲書), そのtitle pageはThe ENGLISH Secretorie, or, Methode of WRITING OF EPISTLES AND LETTERS WITH A DECLARATION OF SUCH TROPES, FIGURES, AND SCHEMES as either usually, or for ornament sake are therein required.... と大変長い。そこに掲載されているclosing paragraphsには盛んに分詞構文が用いられている。この分詞構文で書簡の初めと終りを書くのは旧式商業英語の著しい特徴の一つであるが, 米国のbusiness writingからは, 第一次大戦のかかなり以前から, 陳腐, 無気力の印しとして, 締め出されているものである。Angel Dayの書には, Acknowledging my selfe deeply bound unto your Lordship for many sundry favours, I do remaine in all humble reverence...とかFinding my selfe manyways beholding into your exceeding courtesies, I end...とかいったclosingが盛んに掲げられている。分詞構文というものは文の副詞的修飾要素として用いられる構文で, 実質的には「(論理的主語+)分詞」の形式によって節の働きをするのであるが, 形式的には節ではなくあくまでも句である。これは「時・理由・原因・仮定・譲歩・付帯事情などを表わす」といわれているが, そのいずれであるか断定できないものがあり, その表現が省略されて情緒的色彩が多分にあるところが分詞構文の特徴となっている。口語では殆んど用いられない, 文語的表現であって, 文語的であることと関連して文体に色彩を添える働きがあるから, 手紙の最後に分詞構文をわざと置くのは相手に対する敬意と親密を交じえた一種の柔かさを狙ったものと見てよいであろう。日本語でも「お返事をお待ちしています」よりは「お返事をお待ちしつつ…」の方が情緒はある。(往年, 吉屋信子調というスタイルが流行した時代があった。)

ところがそういうあいまいさや情緒的色彩はbusinesslikeに事を運ばなければならない今日のbusinessには適しない。もちろん, いくらbusinesslikeとはいっても, 事実を伝えるのに事実だけを書けばいいというのは極端で, 良いニュースにはWe are pleased to inform you that~というような飾り文句をつけるのは人情であるし, それはYou-attitudeやpolitenessにつらなるものである。ただ, あいまいな表現や格式ばった言いかたは, 美辞麗句ではあっても, 力(force)に欠け, 生彩がないから, 結局誠実さも乏しく, politenessにも反することとなる。ところが大変興味深いのはDayがepistlesを“the familiar and mutuall talke of one absent friend to another”定義している点である。これは正に“Write as you talk!”の今日のBusiness Englishのスローガンと同一である。

1803年, 匿名の著者の手に成るThe New Complete General Letter-Writer and Universal Correspondentの序文の“Letter-writing is but a sort of literary conversation, and that you are to write to the person absent, in the manner you would speak to him, if present.”という勧告はまことに注目すべきもので, 今日の米国の新式business writingの唱道者たちの言としてもそのまま通用するといえよう。次はそこに掲載されている書簡の一つである:

SIR,

I am very much surprised at your long delay in answering my letter

of the 21st past, wherein I ordered sundry pieces of goods, agreeable to the patterns enclosed, which I am now in immediate want of; therefore I hereby inform you, that unless I receive them in proper time to answer my demand, which must be in a week or ten days hence at farthest, they will be of no service to me; consequently I shall be obliged to return them at your expence, as they are articles I cannot dispose of after that time, being for a particular customer, whom I annually furnish with these commodities. I wait your immediate answer for my government, that I may have recourse else where if you cannot supply me. I expect all possible encouragement in the price and quality, if sent; and for the amount you may value yourself on me at pleasure.

Sir,

Yours,

全部を one paragraph に収めているのは Paston letters 以来であるが、しかし、初めの長文は 2 箇の semicolon で観念的にははっきり切れており、実質上は 3 箇の文の集合と見ることができよう。hereby, hence, expence, else where, government (=demeanor, conduct, discretion) というような archaism や being for a particular customer という分詞構文の使いかたなどはさすがに時代がかってはいないけれども、全体の極めて personal な調子と businesslike なおどしは活目に値いする。このさし迫った、しかも技巧的な調子は積荷の遅延にいらいらしている深刻さを読者に強烈に印象づける。その意味で非常に現代的である。

試みに、20 世紀の今日なお見られる旧式の次のような書簡と比較すれば、個性と人間味；無気力と紋切型などの点で、どちらが商業書簡として優れているか、驚くばかりである。

18th June, 19--

Gentlemen,

We have to inform you that we have to-day issued a letter of credit No. 53896, on your house, in favour of Mr. Harold Faulkner, for the amount of 12,500 frs. (Twelve Thousand Five Hundred Francs).

Kindly give it due protection.

Yours faithfully,

THE EMPIRE BANK

このように見てくると "Write as you talk!" のスローガンは 20 世紀に始まったものではなかったし、archaic expression がその時代性を反映した避けられないものとして往年使用されたという事情と、形式的な、お座なりの、没個的、無味乾燥な「既製」表現の無批判的使用とは同じではなかった。すなわち、選択・恣意性という点で、その両者の間には大きな開きがあったということなどがはっきりしてくる。

われわれはここで、当時の business 以外の世界での書簡がどうであったかに触れたいのであるが、紙数の制約上それらの資料の紹介を割愛せざるを得ない。

英国の文壇は Dr. Johnson が現れると、良きにつけ、悪きにつけ、elegance, dignity, elaboration への方向にいよいよ勢を増していったが、その形式的な、凝った散文の伝統は Victoria Age に入っても大きな変化を受けずに続いている。それが、Macaulay (1800~59), Thomas Carlyle (1795~1881), Matthew Arnold (1822~88), John Ruskin (1819~1900), Walter Pater (1839~94) などに見られる特徴であり、"The religion of beauty" の aesthetes は美しい色彩と韻律をもった散文を求めたが、それはしばし日常の話シコトバとはおよそかけ離れた特別の文学コトバとなった。

しかしながら、それはこの時代の大きな流れであって、19世紀の人がみんなそういう文体であらゆる〈場〉の writing に臨んだわけではない。

次の Thomas Carlyle (1824) と Charlotte Brontë (1847) の書簡はこの意味で非常に対照的である。

Poor Byron! alas, poor Byron! the news of his death came upon my heart like a mass of lead; and yet, the thought of it sends a painful twinge through all my being, as if I had lost a brother. O God! that so many souls of mud and clay should fill up their base existence to its utmost bound; and this the noblest spirit in Europe should sink before half his course was run. Late so full of fire and generous passion and proud purposes; and now for ever dumb and cold. Poor Byron! and but a young man, still struggling amidst the perplexities and sorrows and aberrations of a mind not arrived at maturity, or settled in its proper place in life. Had he been spared to the age of three-score and ten, what might he not have done! what might he not have been! But we shall hear his voice no more. I dreamed of seeing him and knowing him; but the curtain of everlasting night has hid him from our eyes. We shall go to him; he shall not not return to us. Adieu. There is a blank in your heat heart and a blank in mine since this man passed away.

Carlyle の声はあるときは嵐のごとく叫び、あるときは口ごもり、あるときは高らかにこだまする。また予言者のごとく運命を宣告し、散文の中にも劇的な手法や詩的技法をふんだんに使用する。Sartor Resartus や the French Revolution の Carlyle の姿は、天折した詩人 Byron の死を悼むこの手紙の、血涙をふりしぼる Carlyle の姿でもある。

I now send you per rail a MS. entitled, "Jane Eyre," a novel in three volumes, by Currer Bell. I find I cannot prepay the carriage of the parcel, as money for that purpose is not received at the small station-house where it is left. If, when you acknowledge the receipt of the MS. you would have the goodness to mention the amount charged on delivery, I will immediately transmit it in postage stamps. It is better in future to address Mr. Currer Bell, under cover to "Miss Brontë, Haworth, Bradford, Yorkshire," as there is a risk of letters otherwise directed not reaching me at present.

To save trouble, I enclose an envelope.

この手紙は才智を見せびらかすこともなく、真理を並べたて逆説を積み重ねたりすることもない。非常に純粹で高潔な人柄の彼女はつねに正しさと真実さに対する崇高な敬意を保ちつけていた。嘘をつけない大きな眼、^{せつめい}性急なまでの烈しい正直さ、気取りや尊大さに対する嫌悪、そういった性格がこの手紙にもよく現れていると思う。必要な用件を、余計な文言を使わずに要領よく伝えているところは今日の business writing の模範になるであろう。

しかし、個々の文体は別として、全般的な趨勢としては、Johnson style がそのまま受け継がれ elegance や elevation を狙う気風は文芸の主流となっていた。

一方、19世紀の中産階級——特に商人たち——はどうであったか。彼等は実利に敏感であり、実際の知識の吸収に大童であったが good taste や propriety に関する自分自身の感覚は持たず、あるいは持ってもそれを全面的に確信できなかったので、何かしかりしたもの、何か標準となるものを求めた。その結果、そのときどきの複雑なく場)や nuance にいちいち心を煩わす必要のない、堅実な、動かぬ dignity として頼れるものを探した。産業革命を経験し、民族主義の興隆・立憲政治の運動・科学の発達・物質文明の進歩を見た彼等は18世紀の貴族主義や irony や wit や elegance に満足できず、自分自身の分別や taste は持たないままに、そこに何か規格化した、不安定でないものを求めた。頼れるものは彼等自身の権力体制——政府、財産、新生科学——である。そこには分業を基盤にした規格品に対する安心感や機械文明に対する賛嘆からくる数・量・尺度に対する信頼感に通じるものがあつたのではなからうか。個々のく場)にまつわるごまごました複雑性や面倒臭いものには頭を悩ませないですむように、何かどしりした businesslike な dignity として頼りになれるものが欲しかった。

教養のないのにラテン語を鵜呑みにして英語との妙な combinations (例, as per) をつくったり、we take the liberty of ~ と改まって相手にアプローチしたり、Enclosed please find herein ~ と特殊な語順を使って重みを添える等の書き方が次第に business jargon を創り出していった。預金者に誇りと安心・信頼感を与えるためには銀行が堂々たる建物でなければならなかったように、商人たちには投資家や顧客に安心して取引を任せられる気持を持たせる十分な印象的文体が必要であった。そうした文体は鈍重で抽象的でどしりしていなければならない。正確・精密・簡潔な言葉を得得するよりはむしろ言葉数の多い、ごたごたした文章が官僚的に重々しく聞え、専門用語らしい語句をふんだんに用いれば権威ある学問のように響き、鈍重さは何か大物の威厳を保証するもののように受取られることを感得したのである。

こういう種類の言葉はやがて、writing に自信のない無教養な大衆に憧れの眼をもって迎えられるようになる。そうなると創作者たちは自分でもそれらの表現を賞賛し、ますます凝ったものを生みだすようになる。それはあながち無知な大衆だけに限らない。立派な businessmen が 'along this line' とか 'we beg to state' とか 'to contact' とかいう almighty な安直な表現の中に安定感を見出すのである。自分自身の、直接的、積極的な刺戟を恐れ、他人が自分についてどう考えるかを気にする人にとっては、jargon は匿名のような隠れ^{その}囊を提供してくれる。他人の反対や非難を恐れる人、人間関係の複雑さ、人間相互の異和感、愛情、憎悪、気まぐれ、利己心、強引さ、無責任その他のあらゆる種類の感情から起る面倒な問題を回避するためには jargon はまたとない重宝な道具である。そ

れは具体的な複雑な問題を気化させ、画一的な灰色の霧の中に溶散してしまふことができる。Jargonの中では人は誰も、何もしない。何も感じない。何も起さない。誰も意見を持たず、誰も責任がないのである。すべてがぼかされてしまふ。"I have an opinion."ではなく"Opinions are had."であり、「誰かが何を書いた」ような印象を与えるのは拙いから、或る考えは機械の中から生産されたかのように、ただ「出てきた」("came about")のであり、「訳の分らぬ理由が重なって」("for some unknown reasons")或る結果が生れた、ように語るのである。Our order(「当方の注文品」)は自然現象であるかのように"has not yet come to hand."なのであり、物を頼むときは"at the earliest possible moment"であり、精々"without further delay"なのである。

Business jargonの隠れ蓑はたしかに或る時代、或る〈場〉ではそれなりの存在理由があったであろう。だからこそあれだけ愛用されたのである。しかし今は舞台は完全に移り変わり、その価値は喪失してしまった。これが再び脚光を浴びて歴史の上に再登場するか否かは何人にも分らない。現に極めて保守的な、business writingの点でbackwardな地域ではなお依然としてそういう表現が受けている。それはそうした表現を要求する〈場〉がそこにあるからだと言えるであろう。ただ、大勢として眺めた場合、今日のようにますますスピード化し、直接化していくbusinessの世界ではそのような表現が主流となって再登場するかについては大いに疑問がある。

いずれにせよ、そういったものはBusiness Englishの素材に対するstylistic preferenceの変化であって、これをB.E.の本質的变化と考えるのは誤りである。Business jargonが一世を風靡していたと思われる全盛期においても、やはり、そこには恣意性・選択性があったし、当時の社会全般の書きコトバに一つの風潮というようなものがあって、それが他の時代におけるよりもbusiness jargonを使いやすくする支えとなっていたことは否めないとしても、なお、そうした時代にあっても、絶えず、そのようなwritingに反対するcounter-currentが存在していたからである。